

弘前市協働によるまちづくり推進審議会 会議録概要 (第3回)			
日 時	令和3年9月21日(火曜日) 18時00分～20時00分		
場 所	弘前市役所市民防災館3階防災会議室	傍聴者	2名
出席者 (18人)	委員 (13人)	佐藤会長、安田職務代理者、 野口委員、藤岡委員、下山委員、小山委員、大西委員、 鴻野委員、大塚委員、斎藤委員、宇野委員、青山委員、柴委員	
	執行 機関 (5人)	市民協働課	高谷課長、村田課長補佐、小山主事、片岡主事
		商工労政課	西谷主事
会議概要			
1. 開会			
2. 議事			
<p style="text-align: center;">条例に関する事業の実施状況の評価及び改善点等について審議 事業者との協働によるひとづくりに関する取り組み</p> <p style="text-align: center;">(1) 第2回審議会での意見について</p> <p>【事務局から説明】</p> <p style="text-align: center;">(2) 分類③ 就職マッチングについて (3) 分類④ 子ども等の職業観の醸成について (4) その他(市の取り組み全体を通じて)</p> <p>【市の取り組み状況を事務局から説明】</p> <p>【各委員の意見等】</p> <p>会 長: 就職マッチングについては、取り組んでいる事業が5事業挙がっています。基本的には、失業している人をどう職業と結びつけているか、あるいは就職しているけれども転職を考えている人とうまく結びつけられているかどうか、この5事業を参考例にして、個別の事業を問題にさせていただいてもかまいませんし、全体を通して就職マッチングのあり方についてお考えをお寄せいただいても構いません。早速ご意見を伺いたいと思います。</p>			

委員：ご説明いただいた事業には、似たような内容の事業も見受けられる中、担当課が別々になっています。多分もうやられているとは思いますが、けれども、担当課同士の横の連携というのが非常に大事かと感じます。例えば、事業 No. 13「生活困窮者無料職業紹介事業」と、事業 No. 14「農福連携モデル事業」であれば、生活困窮者や障がいのある方が農業に従事するという事も考えられます。また事業 No. 15「休職者等農業マッチング緊急支援事業」は、コロナ禍によって休職や自宅待機となった市民を対象にしているということですので、No.13 の事業と対象者が共通していますし、「就労を支援する」という点でも事業としては非常に似通っています。それぞれの連携が図られているとは思いますが、より深くつながれることを期待したいと思います。さらに、事業No.12「ひろさき移住サポートセンター東京事務所無料職業紹介事業」、No.16「地元企業魅力発信事業」についてですが、これらも現在のコロナ禍という状況に合わせて、ともにオンライン等を活用していることが特徴だと思います。多分このオンラインというのは、コロナが収束した後も我々の仕事や生活の中に定着したものになり、どんどん活用されていきますし、一般の学生さんとかも就職活動をほとんどオンラインで行っているぐらいですので、そういった意味ではオンラインでの活動というのをますます広げていっていただければと感じます。特に、東京事務所の職業紹介ということで距離的な問題もありますし、地元企業の魅力発信というところでは県内のみならず全国の大学に情報発信し、誰でもアクセス可能にする取り組み、またはNo.12 とNo.16 の事業が連携を取ることで、より効果的な運営が期待できるのかなと感じていました。

委員：質問なんですけれども、平成 28 年・29 年頃から令和 2 年・3 年の間の期間に行われた事業についての記載がありませんが、この期間に新しく始めたけれど成果が上がらなかったからやめた、という事業もあるのでしょうか。

商工労政課：その期間の事業について、少し形は違いますが、商工労政課と東京事務所が連携して、小規模で対面式の企業説明会を開催したことがありました。ただ、集客が難しく、事業を進めていくにつれ、マッチングに至らない状態となり、最終的に事業を廃止したという経緯があります。その

あとは、地元企業の方々が県外で開催される合同企業説明会等に参加した場合に、その参加料や旅費を補助するという事業をやらせていただきました。参加料や旅費を補助することによって、最終的にマッチングに結びつくことを期待して、この事業を2年やらせていただきましたが、いずれの年も実績がなく、事業を廃止しております。

委員：色んなマッチング事業がされていますが、青森県って全国的に見ても企業さんがお支払いしている賃金が結構低いと思うんですよ。県内の企業さんが出された条件を全国に発信したとき、その企業の賃金に魅力を感じて来て下さるといよりは、田舎ならではの楽しみ方とか、多分皆さんそういうことを求めて中央から地方の方に動いてらっしゃるんじゃないかなと思います。やっぱり中央の方が賃金が高いですし、企業さんだけの力ではちょっと弱いかもしれないので、仕事以外の弘前ならではの魅力を発信して、「マッチングするところいうことができます」とか、そういうところもうまく魅力の一つとして載せてみてはいかがでしょうか。

委員：新型コロナウイルスの収束がどれくらい先なのかわかりませんが、おそらく数年はかかるのかなというふうに思います。そのことを前提にすれば、例えば事業 No. 15「休職者等農業マッチング緊急支援事業」、No. 16「地元企業魅力発信事業」などはコロナ禍で緊急的に始められた事業だとは思いますが、数年単位で考えていかれるといいのかなというふうに思いました。また、事業 No. 15 の休職者等農業マッチング緊急支援事業について、学生はコロナ禍になって飲食店の経営が厳しい状況になった時にアルバイト先が減ってしまっているというのが現状だと思います。大学生のニーズがどれくらいあるかわかりませんが、そういった学生にもアルバイトという形で支援できるルートが、もしありそうであれば検討していただけるといいのかなと思います。

委員：事業 No. 15「休職者等農業マッチング緊急支援事業」に関してですが、会社や事業所に賃金の補助を出してもそれが働き手に回ってはいかないんです。そういう仕組みになっているので、働き手を増やすための効果的な取り組みを行うのであれば、働く人達に還元されるような仕組み

みを作っていく必要があると思っています。

会長：補助金が活用されている事業に関しては、どのように補助金が活用され、どれだけの効果があったのかの検証もしっかり行っていくことが大切ですね。

委員：弘前市として、どういった人に対して重点的に就職マッチングしていくかというところを議論することも必要なのかなと思います。弘前市が大学生の数が県内で一番多いのかなと思います。一例ですけれども、大学生に対しての就職マッチングを考える場合、学生の保護者に対しての理解を促していくという事例も全国的に見るとあったりもします。学生に関しても、看護師などの医療人材になりうる学生の県外就職率は全国1位になっていますので、そういう医療学生に特化したマッチングもシェアできないのかだとか、分野に特化して、いろんな課と連携して考えていくのが大事かなと思いました。例えば、他にも秋田県の鹿角市などであれば、シングルマザーや片親向けの就職マッチングに重点的に力を入れています。市町村によって、何に重点を置くかは違っていますので、それも参考にしながら考えてみるっていうのもありなのかなと思います。また、イベント等の情報発信の部分にも課題があるのかなというふうに思いました。実際、就職マッチングを希望されている方も潜在的には結構いると思うんですけれども、その人たちに情報が届いていないということがあったりするのかなと思いますので、そうした情報発信の部分をいかに改善していくのかということも大事だと思いました。

委員：資料3のP.23「就職マッチングに関する全体の所管、成果、課題」にあるとおり、企業等からは事業No.14「農福連携モデル事業」がすごく良かったという声もあります。こうした良い例を参考にして、もっとマッチングを広げていけたらなと思います。私も就業サポートセンターに立ち寄ったときに、「農業分野の仕事を紹介したら、とっても真面目で一生懸命やるからすごく喜ばれてる」という声を聞いていたので、良いなと思っています。

委員：事業No.21「地域産業魅力体験事業」についてです。工芸品に関連した

こんなに良い事業があるのであれば、是非進めてもらいたいです。この事業について、連携している企業等の箇所に、青森県漆器協同組合連合会、ブナコ(株)、(有)こぎん研究所、津軽千代造窯などの記載がありますが、他にもっといっぱいあると思います。例えば、ねふた絵につながる凧絵であったり、あけびづるの細工であったり、下川原焼きの鳩笛だったり、子ども達が体験して喜びそうなものはもっといっぱいあると思うので、その辺りをもう少し膨らませてもらえればいいなと思います。

委員：質問なんですけども、事業 No. 20「ひろさき「農の魅力」体験事業」で、令和3年度から親御さん(保護者)の参加が無くなっているのは、やはり通年で実施するうえでの配慮の結果なのでしょうか。学校の授業等で実施するにしても、やはり最終的には小学生は特に親の影響が大きいと思うので、親御さん自身が感じている農業に対する魅力や価値観を、この事業に参加することでちょっとずつ変えていくという部分で、最後の収穫だけ参加するとか、巻き込む人の数を増やしていければ、もうちょっと影響力が大きくなるのかなと思っておりました。

委員：全部の事業を見て、かつて学校教育の中に総合学習っていう科目があって、そこで扱われていたことが新規の事業となって出ているところがあるなど、ざっと見て感じました。弘前市立第二中学校では、「総合津軽」という授業の一環で、三味線や裂き織り、ねふた絵、お茶といった津軽の文化を体験する授業があります。そのように学校教育の中でやっているものと、市が主導でやっているものとの差別化・区別化というのが、資料を見ただけではちょっとはつきりしないところもあります。あと、事業 No. 17「地域マネジメント人材育成プログラム構築事業」と事業 No. 19「弘前ポスター展」は、実際に学生さんや参加する人達がポスター作ってみたり、いろんな交流イベントのようなことを考える活動になっています。一方で、その他の事業は体験であったり企業を先生方が見に行くツアーであったりということで、子ども等の職業観の醸成に関する取り組みは、大きく二つの柱立てになっているのかなという感じがしました。

委員：事業 No. 20 のひろさき「農の魅力」体験事業ですが、「工の魅力」もあ

ってもいいんじゃないかなと思っています。これは、農業経験者と連携ということでございますけれども、農業経験者はあまりにも専門的ですので、例えば専門分野を学ぶ高校生との連携ということも考えてみるのもいいのかなと思います。例えば農業高校に小学生が行ったとき、実際に農業に従事している本職の方からのお話よりも、小学生にとっては農業を学んでいる高校生から聞いた方がよく分かるのではないかと思います。工業も同じで、工業高校で学んでいる高校生の方から話を聞くほうがわかりやすい。さっきお話があった弘前二中でやっている総合津軽の授業で、ねふた絵を習って絵師になっている方もいるんですよ。そういうことがあるので、「農の魅力」「工の魅力」両方あってもいいのかなと思います。

委員：各事業のラインナップを見ていると、行政が主体でやる事業だからかもしれないですけども、子どもの職業観の醸成というよりは産業育成の方に重きがあるように感じます。例えば農業であったり、地元の工芸品であったりとかですね。もちろんそれは地域の財産なので必要かと思うんですが、特に小学校・中学校であれば、世の中の色々な地域にある、お菓子屋さんやラーメン屋さん、お医者さんとか消防士さんとか、いろんな仕事があって地域に根差してみんな働いている、というところを見せられるような事業もあれば、小・中学生たちは楽しいのかなと思います。

委員：まず、「ひとつづくり」ですよ。弘前は協働のまちなんですよ。協働の意味とか価値をどれくらい市民が理解しているかという課題が一つあるうえで、事業者との協働によるひとつづくりをしていこうということなんですけども、「市としてどういう人を作りたいのか」というビジョンがよくわからないなって思うんです。地域への愛着や誇りを育むってことはやっぱり自己肯定感を高めていくためにも非常に重要なところで、そうすると先ほど意見があったように、親も巻き込んで雰囲気を作っていくというのは、凄く有効であると思うんです。ただ、学校で授業の一環として実施していくとなったとき、楽しい雰囲気でも大人も含めてみんなを巻き込んでいくっていうことが難しいケースもあるので、まず今後の検討課題かなと思いました。あと、事業No.19「弘

前ポスター展」は商店街を取材してポスターを作ろうという、凄く良い取り組みだと思っんですけれども、大手の広告代理店に委託して、そんなにお金を掛けてやる必要があるのかなと疑問です。また、このコロナ禍というのは、今までのやり方などを見直す良いきっかけだと思っんです。私たちが持久力を持って過ごしていかなければいけないこのコロナ禍の時代、子どもたちも閉じ込めておくことができない。そうしたら、どんな工夫をして子どもたちに楽しい体験をしてもらうか、「弘前っていいな」という愛着心をどうやって育んでいこうか、知恵を絞る時期だと思っんです。一つ一つの事業の内容が非常に工夫されて、考えられてやられてきたかもしれないですけど、本当にこのままでいいのかっていうのは各課でもう一度揉んでいただきたいなと思っますし、やはり選定事業者は弘前にもっとたくさんあると思っんです。だから、弘前市そのものが「弘前市全体を巻き込んで人を作っていこう」「頑張ろう」「コロナと伴走して行こう」みたいな感じでやれたらいいんじゃないかっていうふうに思っます。

委員：事業 No. 19「弘前ポスター展」について、私も意見があります。私が言いたいのは、地元には優秀なアートディレクターがいっぱいいるのに、何で地元の企業じゃなくて東京の大手企業に委託して、東京のデザイナーを呼んでくるのかなということです。そこが疑問ですね。

委員：良い例なのかどうかわからないんですけれども、先日、医カフェを運営している弘前大学医学部の学生の方たちと関わる機会がありました。その学生の方たちに、彼らが取り組んでいることについて伺いましたら、事業 No. 17「地域マネジメント人材育成プログラム構築事業」に参加している高校生のうち、医学部を受験する高校生とその親と交流し、自分が合格した時の体験も含めながら勉強以外の部分でサポートしているという話を聞いたんです。大学生が自分たちの体験を生かして高校生を支援・バックアップしていて、とても良い例だなというふうに思っっています。そういう大学生の姿を見て、育っていく高校生たちもいると思うので、凄く良い展開かなっていうふうに思っます。

委員：是非取り入れていただきたい情報があります。どうやら、人生の第一タ

ーニングポイントは小学校4・5年生のあたりにあるらしいとデータに出ています。大人になってから、その時に触れたりしたものに関係する仕事に就いている人が多いんです。例えば、小学生の時に興味があるものに「体験」が加わったときに、将来の職業選択の時にそれが思い起こされることがあるので、小学校の中学年から高学年にかけて様々な体験をするということは有益です。何か事業を組み立てるときにヒントにしていればよかったかなと思いました。

会 長：ありがとうございました。私からの意見としては、やはり商店街は弘前の顔でもあると思うので、もっと活性化したほうがいいと思います。商店街の活性化も、産業人材の育成という点ではひとつづくりであると思いますが、そういう事業がなかなか見えてこないなと感じます。その他、ご意見など無いようでしたら、本日の審議はこれで終わりたいと思います。

7 事務連絡

8 閉会